NPO「知多から世界へ」が取り組んでいる国際交流
日本経済再生・２０５０年中部国際空港構想について
とこなめ陶の森資料館　２０２３年５月２０日
NPO「知多から世界へ」　理事　　磯　貝　徹　氏

中部国際空港は、２０世紀後半およそ３０年にわたる成田空港整備事業による、国と地域との幾多の困難を克服して制定された「空港と地域の共生の基本的な考え方」に基づいて造られた全国最初の空港です。

磯貝　徹氏は、中部国際空港の建設当初より建設事業に従事され、空港開港後は関係者と共に「NPO 知多から世界へ」を立ち上げられて、地道に丁寧な行動力で知多地域の発展に尽力されました。これまでの地元知多地域の中学生の英国派遣事業などの国際交流の様々な体験と、今後の中部国際空港の発展のあり方についてお話し頂いた内容を要約して報告致します。

１．　ＮＰＯ「知多から世界へ」に芽生えた国際交流

（１）　講演会活動　2005 年から２回/年、現在まで 33 回開催し空港と地域の関係の強化に貢献

（２）海外との交流

①　米国ワシントン州への友好親善訪問２０１４年 ４ 月州知事昼食会・ボーイング工場見学・音吉史跡の探索・音吉演劇の開催・シアトル桜祭り等を行い、後年愛知県とワシントン州の友好親善協定締結・ボーイングの一号機のセントレアへ贈呈に貢献するという結果につながりました。

②　中学生を 2015 年から毎年夏に 2019 年まで５回 68 名を英国へ派遣し、中学生が国際交流の大切さと楽しさを学びました。

（３）開港から１８年間　学んだこと

①　国際交流の大切さ　戦争していても世界は一つ

②　空港の大切さ　国際交流の要　世界が整備向上に努力

③　地域の活性化　年齢を問わず、地域全体が元気になる

④　「空港と地域の共生に関する基本的な考え方について」

（４）NPO が世界に通用する国際空港造りに取り組む

①　開港時に比べ世界の航空需要は、急激に増加。初期の構想にこだわる時代ではない。

②　主要な世界の空港の６０％以上が、同時離発着可能

２．　中部国際空港の現構想・計画案

（１）　現構想案の滑走路の処理能力・滑走路間隔

①　滑走路の処理能力を現在の 1.5 倍とする世界の航空旅客数は、30 年間で約７倍伸びている。コロナ禍後はさらに伸びると想定される。

②　現在の誘導路を代替滑走路に転用する暫定案では２本の滑走路間隔 210mで世界最低レベル。

沖合に造られる将来計画案では２本の滑走路の間隔は 760mでそれでも世界最低のレベル。

（２）空港と地域の共生の基本的な考え方がない。

３．中部国際空港の現構想・計画上の問題点

（１）　国際線が飛んでこなくなる。

デルタ航空(北米直行線)の撤退。休止しているヨーロッパの航空会社は復旧するか？

①　国際観光客からの収入減少。１千万人国際線旅客/年　地域収入１兆５千億円/年

②　国内の国際旅客の首都圏へ流出。リニア開通により加速。

（２）中部国際空港の現構想では、日本の活力が低下する。日本経済の復活ができない。

①　中部圏は、国土形成計画において、世界最強のものづくり地域を目指しているが、中部国際空港の現構想では、実現が困難になる。

②　首都圏・関西圏と一体的な連携が（特に災害時）が難しくなる。

（３）コロナ禍後の世界に通用する空港ではない。

①　世界はいかなる災害に襲われようと、常時国際航空輸送網力の堅持できる空港を求めている。

②　アメリカでは、２０２１年インフラ投資雇用法が成立し、コロナ禍後の優れた社会資本整備の重要性が打出されている。世界に通用する空港が求められている。

４．現構想・計画案の変更を求める背景

（１）　２月５日の知事選の公約

知事選挙の知事の主な公約は、国際空港を前提にしていて国際便が頻繁に飛んでいることになっている。

（２）　コロナ禍後、ウクライナ侵攻後は国際交流の高まり

停滞した世界経済の再生、分断された国際物流の再編成など２１世紀の国際航空輸送網は、常時途切れることなく、機能し続ければならない。空港は、飛躍的に拡大する。

５．　世界が日本に求めていること。

世界経済の再生　目覚めよ日本！

世界は、日本が、アジアを代表する民主主義国であり、世界経済再生のため、積極的に活動することを期待している。コロナ禍後、世界人口の増加、アジア諸国の経済成長など、国際航空輸送網の拠点は、格段に増加すると考えられる。２１世紀後半航空輸送需要の増加に対処するため、世界の空港は、国際航空輸送網の拠点の整備を強化している。日本は、アジアの玄関口が期待されている。中部国際空港は、１９９８年第１種空港に指定され、成田・羽田・関空と共に２１世紀の国際空港としての役割が期待されている。

６．　２１世紀が求める中部国際空港の構想・計画づくり

地球は、一つといわれ５０年、通信技術の発達により、地球上で距離に感覚は消えたといわれる。ボタン一つで世界中どことも会話ができる。一方航空機などの発達により、日常生活圏は、格段に広がってきている。今では、南アフリカまで、シンガポール経由して一日で行ける時代です。国際航空輸送網の拠点が世界中で整備され、これからも世界の航空需要は大きく伸びると考えられる。我が国も、コロナ禍後、ウクライナ侵攻などの不測の事態が発せしても、常時世界とつながる国際航空輸送網の拠点の維持・改善は急速に実施されなければならない。

中部国際空港は、我が国を代表する国際交流の要である。